

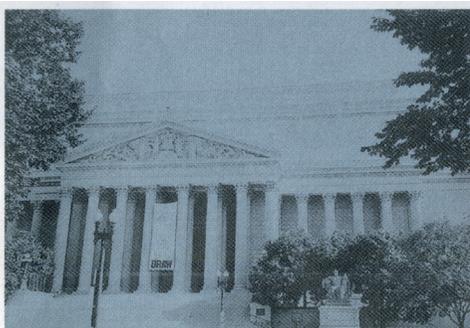
開戦・終戦時における日本の 対外報道と米国傍受記録集成

北山節郎編・解説

太平洋戦争 メディア資料

全2巻

- Ⅰ 開戦—真珠湾攻撃と対外報道
- Ⅱ 終戦と対外報道



緑蔭書房

刊行にあたって

太平洋戦争史研究は戦後50年をへて、質・量とも大きく発展した。その中で戦時の電波メディアに関する資料や研究の蓄積は遅れている。電波メディアは戦時体制下にあつては、国家の対外報道・宣伝戦、情報戦の重要な機関として国策的役割を担う。戦時国家における政策の遂行、とくに軍事、外交上の適格な意思決定にとって、正規の手段を閉ざされた戦時下では海外放送や通信社の電信の傍受＝敵国情報の入手と解読は不可欠の要素である。近代戦争は情報戦争といわれるように、日米情報戦争の勝敗がそのまま太平洋戦争の雌雄を決した。

本資料集は太平洋戦争下の電波メディア資料を網羅したものではない。編者は日米開戦・終戦時の重要事項、日米開戦ニュース、ポツダム宣言受諾、ソ連参戦、原爆問題等の事項に、電波メディアの面から光をあてそこに浮び上がる問題点の検証を試みた。その検証に用いた膨大な資料群が本資料のベースになっている。中心資料は日本のメディア資料を加えて時系的、立体的に再構成した。編者が今回公刊した資料はそのほとんどが第一次資料である。戦時メディア史研究はもとより広く太平洋戦争史、国際政治史研究にとっても貴重な財産となるだろう。

次に資料Ⅰ・Ⅱの内容の概略を記しておく。資料Ⅰ『開戦－真珠湾攻撃と対外報道』は下記の通り。一「ハワイ奇襲第一報」は、ハワイ攻撃、開戦ニュースに関する種々の放送、新聞資料を収録。二「米傍受記録に見る12月8日の日本側報道」は、日米開戦前後の12月7日～9日にかけて米国等が日本側の放送を克明に傍受・記録したものを時系的に整理した資料。三「ニシノカゼ ハレ」は、暗号書等の完全処分を海外公館に指示するために天気予報による暗号“ウィンド・メッセージ”として放送した資料で、今回新たな資料を加えて収録。四「極東国際軍事裁判と開戦の放送」は、極東軍

事裁判に提出された開戦発表に関する放送資料。五「同盟報道」は、同盟通信社のホノルル発ハワイ攻撃ニュースに関する資料を収録。

Ⅱ『終戦と対外報道』は下記の通り。一「二つのラジオ・トウキョウ」は、戦時中の日本の対外報道の担い手・システムと外国とくにアメリカの傍受機関と傍受記録の所蔵状況に関する資料。二「黙殺」は、ポツダム宣言報道をめぐる内外の動向、とくに宣言「イグノア（黙殺）」報道の記録とアメリカの受け取め方を紹介。三「原爆」は、原爆投下、広島被爆及投下批判に関する日本の報道記録。四「ソ連参戦」は、国内報道に先だつソ連参戦の海外向け報道の記録。五「最初の『聖断』と広島その後」は、アメリカが解読したポツダム宣言条件付き受諾報道の記録と原爆投下の対米抗議、連合国の残虐行為に関する報道の記録。六「待つ日々」は、ポツダム宣言受諾から連合国回答の受諾をめぐる報道記録と原爆投下非難の報道の記録。七「8月15日」は、ポツダム宣言正式受諾、玉音放送・終戦放送の傍受記録と種々の詔書英訳文を収録。八「敗戦直後の日本とメディアの解体」は、日本の原爆被害のキャンペーンとアメリカの反発、降伏後の原爆対外報道、ラジオ・トウキョウの海外放送中止そして同盟解体に至る占領直後の連合軍のメディア規制をめぐる資料を収録した。



日本放送協会の海外向けニュース作成風景

表紙の写真の説明——
右は当時使用された米ハマーランド社製SUPER-PRO-200型受信機。左は米国国立公文書館。

情報とメディアの研究を

大きく前進させる資料集

政治や経済において、なかんずく国家と国家がきわめてシビアな交渉を展開する外交において、情報の入手と伝達がかきわめて重要な問題であることはいうまでもないことである。特に、戦時においては、正規のルートは途絶せざるをえないわけだが、かえって隠然たる交渉の必要性は平時よりはるかに高まることになり、情報のデリケートな発信と受信が行われることになる。そうした際に利用されるのが、海外放送や通信社の電信である。だが、これまで情報の重要性は、一般的には指摘されているわりに、実際の研究は乏しいのが実状であった。北山節郎氏は、すでに『ラジオ・トウキョウ』という大著によって日本放送協会の海外放送の実態を丹念な実証によって明らかにされ、また昨年を上梓された『ピース・トーク 日米電波戦』では、ラジオ放送を通

じて密かに交わされ日米の終戦交渉などを発掘された。それら二著だけでも、メディアや情報の研究に裨益するところきわめて大きいのだが、その上、今回、それらの研究のもとになった資料を資料集として編纂され、広く公開に供されるというのであるから、まさに画期的である。もともと、ラジオ放送に関しては保存が難しいという特性上資料が乏しいのだが、ここに収録されているのは、アメリカの公文書館などに保存されていたきわめて貴重な資料ばかりで、これによって、これまで根拠のないまま流布してきた通説のいくつか覆されるだけでなく、情報とメディアの研究を大きく前進させることは間違いない。

推薦
します

有山輝雄 成城大学教授

太平洋戦争メディア史の再検討をうながす試み

北山氏はこれまで一貫して、戦時に日本から海外へ発信した電波の検証に取り組んでこられた。NHK国際放送ラジオ・ジャパンの記者であった北山氏を駆り立てているものは、戦時対外報道に生きた先人への賛歌と鎮魂の思いであろう。

今回の「太平洋戦争メディア資料Ⅰ・Ⅱ」は、いずれも北山氏のこれまでの著作『ラジオ・トウキョウ』全三巻、『ピース・トーク』で展開されている論証の拠り所となっているものである。太平洋戦争勃発時と終戦時という極めて厳しく微妙な局面において、日本の電波は何を伝えていたかは、すでに日本放送協会により『日本放送史』や『放送五十年史』に記録されており、それが正史とされてきた。

しかし北山氏は、これまでの定説に再検討をうながすという大胆な試みに挑戦した。日本の電波をキャッチした米側の傍受記録、ログ・カード、録音台帳等を克明に点検し、日本の記録と突き合わせるという「なぞ解き」にも等しい作業で「事実」を洗い出した。その事実追求のために収集されたのが、この「資料集成」なのである。

研究者の多くは、苦勞して集めた資料は大事に抱え込み公にすることをためらうものだが、北山氏はこの膨大な資料を提供された。「今度は読者の番!」、北山氏のつぶやきが聞こえてくるようだ。

推薦
します

竹山昭子 昭和女子大学教授

63 8月15日、午後1時1分、RT東亜放送「大屋編成部長大演説」全文。
ポートランド傍受

(MR MORE)

PD TO WA AND OWI

U R G E N T

P40057 TOKYO (JAPANESE GEA SERVICE) FROM 12:01 TO 12:30 AM WEDNESDAY
8/15 MTD: NANBARA

(RECEPTION: EXTREMELY BAD)

OFFICERS AND MEN ON THE FIGHTING FRONTS, I AM OYA, HEADING THE OVERSEAS BUREAU OF THE BROADCASTING CORPORATION. WE AT HOME HAD BEEN WORKING HARD AND WE OF THE BROADCASTING CORPORATION DID OUR WORK HARD. TODAY I AM GIVEN THE TASK OF INFORMING YOU OF THE BAD NEWS THAT WE HAVE COME TO A POINT WHERE IT IS USELESS TO RESIST THE ENEMY ANY LONGER. ON AUGUST FOURTEEN HIS MAJESTY ISSUED AN IMPERIAL RESCRIPT THAT WE HAVE COMMUNICATED TO THE ENEMY NATIONS THAT OUR NATION HAS SUEDED FOR PEACE. (RECEPTION IS VERY BAD, SPEAKER'S VOICE IS LOW AND BROKEN UP).

TO YOU WHO HAVE HEARD THIS NEWS FOR THE FIRST TIME I AM CERTAIN WERE TAKEN BY GREAT SURPRISE. I WANT TO REPORT TO YOU TODAY WITH WHAT ATTITUDE THE PEOPLE AT HOME HAVE TAKEN THIS SAD NEWS WHICH HAS BEFALLEN OUR NATION. (THE SPEAKER IS EMOTIONALLY UPSET AND IT IS HARD TO MONITOR HIM, ALSO TERRIBLY NOISY). IT MUST BE TERRIBLY DIFFICULT FOR YOU TO TAKE THE NEWS, BUT WE TOO WHO HAVE BEEN AT HOME ARE ALSO FILLED WITH EMOTIONS WHICH CANNOT BE EXPRESSED. THERE WERE TIMES WHEN PEOPLE QUESTIONED IF WE AT HOME HAD EVER TRULY FOUGHT HARD. (COUGHING)

WHAT WE FELT MOST ANXIOUS OVER WAS THIS ... THAT THE ENEMY SHOULD EVER COME OUT WITH SOMETHING SOME ACT WHICH WOULD DO IRREPARABLE HARM TO THE HUMAN RACE, BEGINNING WITH PREMIER SUZUKI AND THE REST WHO HAVE SUFFERED HARSHIPS UNTOLD. ALL FEARED THE COMING OF SUCH A DAY. OH, HOW REGRETTABLE IT IS, SINCE THE BEGINNING OF OUR HISTORY OF THREE THOUSAND YEARS NEVER HAVE WE FACED SUCH A SITUATION AS THIS.

AT THIS TIME OUR NATION FACES THE CARRYING OUT THE COMMANDS AND WISHES OF THE ENEMY. (SOMETHING ABOUT THE EMPEROR) WE LEARN THIS NEWS, WE THE PEOPLE OF JAPAN ... (THE SPEAKER IS EMOTIONALLY UPSET, FIRST TIME SO FAR THAT AN ANNOUNCER OR SPEAKER HAS EVER ALLOWED HIMSELF TO SHOW HIS FEELINGS--MONITOR).

WE HAVE LOST IN THE FIGHT TO TEST THE STRENGTH OF ARMS, IN THE BRINGING DOWN OF THIS CURTAIN, WE HAVE BOWED TO THE ENEMY'S MATERIAL AND SCIENTIFIC POWER. HOWEVER, IN SPIRITUAL POWER, WE HAVE NOT LOST YET. WE DO NOT THINK THE WAY WE HAVE THOUGHT HAS BEEN WRONG. OF COURSE, WE DO NOT SAY THAT WE WERE RIGHT IN EVERYTHING. WE WERE NOT LOST IN WHAT PRINCIPLES WE HOLD. IF IN ANY WAY WE HAVE ALSO LOST IN THE SPIRITUAL AND MATERIAL FUTURE FOR THE JAPANESE RACE, TO YOU WHO ARE THE SPHERE THERE WOULD HAVE BEEN NO FUTURE, WE ARE STILL STRONG AS A RACE, SO BE STRONG, WE LOSE BECAUSE WE WERE WRONG OR OUR THOUGHTS WERE WRONG BECAUSE WE LACKED THE MATERIAL STRENGTH, WE LACKED SCIENTIFIC KNOWLEDGE AND EQUIPMENT. SO THIS MISTAKE AS A RACE WE ARE STILL STRONG, I BELIEVE.

YOU WHO ARE LISTENING TO ME NOW MUST BE OF EMOTIONS. NO MATTER WHAT THE PROJECT IS BEFORE TOGETHER AND WORK TOGETHER AS A STRONG UNIT.

LOOKING UPON THE CONDITIONS WHICH THE ENEMY ... WHAT DOES ALL THIS MEAN TO US? I THINK TO RECOGNIZE THE POSITION OF OUR EMPEROR. HOW REMAINS, THE ENEMY COMMANDER IS TO ... (NOT REGAINED BY THE SPEAKER. HOWEVER, RECEPTION IN THE WAY OF TAKING DEFEAT, MENTIONS THE FALL OF INSTANCES--MONITOR) ... THUS, FOR THE SAKE OF OF THE JAPANESE WE MUST ALL GIVE AID TO EACH OTHER.

THE FEELING THAT OUR EMPEROR MUST HARBOR CANNOT EVEN BEGIN TO IMAGINE. HIS MAJESTY, SOMETHING TRULY UNPRECEDENTED, THIS TRULY IS (SOLENN VOICE) WE HAVE FOUGHT AND LOST. HOWEVER, POINT TO THOSE OF YOU WHO ARE RESIDING IN THE SOUTHERN REGIONS ... BUT PLEASE BE STRONG AND BE BRAVE. LET US LEARN AND LIVE TO TAKE DEFEAT. WE MUST NOT REGRET IN YEARS TO COME WHAT TIME. WE WILL CONTINUE TO LIVE WELL, SO YOU TAKE YOUR PART TO FACE DEFEAT LIKE A BRAVE ONE. LET US AND WORK TO ONCE AGAIN BRING OUR NATION UP TO AN ADMIRABLE NATION. WE HAVE LOST BUT WE HAVEN'T LOST BUT THIS IS TEMPORARY. IN OUR LONG LIFE SUPPORT WE WERE TO THINK THAT ... HAD BEFALLEN US, THAT REGRET, THOUGH OUR LIVES ARE VERY SHORT ON THIS RACE AND A NATION MUST CONTINUE, AS IN THE PAST.

DEAR FRIENDS AND BROTHERS OVERSEAS, DO NOT AND BE BRAVE. WE ARE DOING OUR PART, SO YOU DO YOUR PART TO GIVE SUPPORT TO BRINGING ABOUT A TRUE YOUR EMPEROR'S WORDS WERE GIVEN TO YOU AND ALL CONTINUE TO LIVE STRONG. INDIVIDUALLY THIS IS THE RACE WE MUST BE STRONG.

YOU HAVE JUST HEARD A TALK BY KUSUO OYA, CHIEF BUREAU OF THE JAPAN BROADCASTING CORPORATION. FM JCT. (TEXTING).

SANDERS

本文見本 (II)

ースは、国内と東亜向けが同時放送されたこと
東亜放送は午後10時から送信が予定されたこと
ニュースが記録された(資料60)。第1項目は
こと、第2が広島へ行政上の調整のため、警備
あとの7本はすべて外電である。

これらの傍受記録により、終戦の日の放送
送五十年史 資料編]に掲載された当日のニ
との相違点も明らかになった。史実を明らかに
照合し、更に検討する必要がある。

大屋久壽雄の知られざる大放送

東亜放送は、国内放送と別に興味深い放送
に、2時から鈴木首相が「大詔を拝し奉りて」
沈黙したと思われる中で、東亜放送は午後2時
相の演説は、午後7時のニュースに続いて放送
料61)。

東亜放送では午後1時1分から30分まで、
の前に立った。

ポートランドではサンダースが、ワシントン
「エモーショナルな演説」というコメントがつ
のニュアンスが強いが、傍受記録では「感動

戦時電波メディア研究の重要な資料

今回出版される資料の大半は、太平洋戦争中、日本が行った海外向け音声放送および海外向け無線電話通信を、米・豪両政府が傍受して作成した記録類である。記録類は膨大な量の一部であるが、日米開戦を告げるニュース、ポツダム宣言受諾、ソ連参戦、原爆投下など、開戦から終戦に至る重要な事項はほぼ網羅している。戦時中の日本の電波メディアの役割を研究する上で、不可欠な一次資料で

あるだけでなく、米・豪両政府の情報収集体制を知る上でも貴重な資料となっている。編者の北山氏は、これらの傍受資料を駆使し、「ピース・トーク」など戦時電波メディアに関する先駆的研究を残された。今後、傍受記録に新たな光が当てられるとともに、記録の収集整備が推進されることを期待したい。

推薦します
向後英紀 NHK放送文化研究所

ドラマのある「風コード」の全容収録

日米戦争が勃発する寸前、日本政府は海外公館との間に、暗号放送「風コード」を取りきめていたことはよく知られている。これはNHKの海外向け日本語放送である「ラジオ・トウキョウ」の中に、日本の開戦の決定を知らせる「天気予報」暗号をしのばせたとするものである。

このため、日本の真珠湾攻撃を、本当はアメリカ海軍は事前に察知できる立場にあった

のではないかと、アメリカ議会の海軍査問もおこなわれている。北山節郎さんは長い間、「ラジオ・トウキョウ」の研究をおこなってきたが、今回、原資料を複製する形で、その集大成を試みた。前人未踏の分野に、また再び、伝説とロマンをはらんだ記録をわれわれの前に提示してくれることになった。

推薦します
田村紀雄 東京経済大学教授

本書の構成

太平洋戦争メディア資料Ⅰ

I 解説

- 「ハワイ奇襲第一報」——消された？大本営発表
開戦ニュース／ハワイ攻撃発表／香港攻撃発表／開戦詔書発布時間／付録～太平洋戦争開戦大本営発表文比較
 - 米傍受記録に見る12月8日の日本側報道米側傍受記録／トランスクリプト研究
 - 「ニシノカゼ ハレ」
ウインド・メッセージの原文は？／フルテキストさがし／天気予報傍受
 - 極東国際軍事裁判と開戦の放送
放送録音盤と録音記録／ラジオ報道記録「報道部ニュース係」ヨリノ抜粋
 - 同盟報道
- II 資料——68件収録(次頁参照)

太平洋戦争メディア資料Ⅱ

I 解説

- 二つのラジオ・トウキョウ
- 黙殺
ポツダム宣言傍受／外国紙が伝えた第1回黙殺報道／

- 鈴木首相の「黙殺」発言／トルーマンが読んだ傍受記録とは？
 - 原爆
FBI Sが記録した同盟の「第1報」／東亜放送の広島被爆連続報道／トルーマンの原爆投下声明
 - ソ連参戦
ソ連参戦を海外に速報／ラジオ・トウキョウも速報／戦闘第一報／大本営発表
 - 最初の「聖断」と広島その後
公電発信時間の疑問／米軍の外交電報解読／傍受されていた国内放送／原爆抗議
 - 待つ日々
米側回答／回答を待つアメリカ
 - 8月15日
ポツダム宣言正式受諾／アメリカが記録した玉音放送／米海軍が翻訳した終戦詔書／大屋久壽雄の知られざる大放送
 - 敗戦直後の日本とメディアの解体
原爆被害キャンペーンとアメリカの反発／ラジオ・トウキョウ海外放送中止／特派員情報ストップ／同盟解体
- II 資料——241件収録(次頁参照)

編者の言葉(北山節郎)

「史実」の発見と再検討のために

日本の国際報道の仕事に30年余り従事する傍ら、先輩の歩みをふりかえる作業をしてきた。その中で、太平洋戦争中、日本の電波を傍受した連合国側の記録にめぐりあった。これを検討すると、これまで「史実」とされたものの嘘と実、新事実が浮き出てきた。

開戦に先立ち、日本の外務省は在外公館に対し、国際通信が途絶した場合、「海外放送」の日本語ニュースを通じて「風信号」を送ると連絡した。米海軍はこの外交電報を解読したが「海外放送」が日本放送協会の七送信ある各地域向け放送の呼称と理解できなかった。そのため国内第一放送や、それを短波で中継した東亜中継放送の気象情報をも傍受し、日米関係の危険を示す「東の風、雨」を聴取しようと「無駄骨」を折るのである。

終戦直前、ポツダム宣言を黙殺するとした鈴木首相の記者会見における発言は、即刻イグノアと英訳され報道されたことになっている。しかし、傍受記録によれば、当日首相の発言は報道されなかった。

同盟通信と日本放送協会の対外報道は、明らかに国内報道と一線を画し、原爆投下非難とソ連参戦に関し速報と詳報を行っていた。特に原爆投下非難報道は、8・6の直後から8・15以後も継続していた実態が明らかとなる。

終戦の詔書は外務省によって英訳され、同盟とラジオ・トウキョウから海外に発信されたが、米国は正午の玉音放送を英訳したほか、外交電報からも詔書を英訳した。それら英訳文の異同は、戦争への認識をも反映した。

玉音放送の一時間後、日本放送協会海外局の大屋壽雄編成部長は、「東亜放送」を通じ30分間にわたり、在外将兵と邦人に対し、軽拳妄動に走ることなく、生き抜くことを訴えた。これを傍受した米国の担当者が、この放送に感動したことを記録にコメントした。一方、終戦時の対外報道に対し、在欧の公使がが非難を浴びせた。その電文が米軍により解読された。

原爆投下非難を敗戦後も続ける日本に関する在外公館と外務省との電文をも米側が解読した。こうした開戦・終戦と対外メディアの諸相を示す資料を解説とともに公開できる機会を与えられたことに感謝する。

本書に収録した主要資料

米FCC(連邦通信委員会)傍受記録
「対米英開戦臨戦番組抄」(邦文)
太平洋戦争開戦大本営発表文比較(邦文)

開戦時「海外放送」番組表(邦文)
トランスクリプト1 12月7日北米西部・ハワイ向け英語ニュース
トランスクリプト12 12月8日国内放送(東亜中継)日本語ニュース
ハワイ空襲発表
トランスクリプト14 12月8日第3送信 北米西部・ハワイ向け日本語ニュース、「ニシノ カゼ ハレ」放送を記録
トランスクリプト23 12月9日第2送信 北米西部向け英語放送
「帝國政府声明」

ウインド・メッセージ実行放送に関する日本人への尋問(10月・11月)

日本放送協会録音記録(邦文・英文)
ラジオ報道記録(邦文・英文)

12月7日ホノルル発同盟電「初空襲開始」(邦文)

「日本側放送の傍受記録インデックス」の分類法

7月27日、鈴木首相「演説」傍受を試みる米国
7月27日午後6時45分、同盟「イグノア」電、ポートランド傍受
鈴木首相会見、米國務省記録
7月28日午後7時23分、東京国内放送「今週の戦況」、グアム傍受

8月6日午後6時、同盟東亜向けカナ文字送信、広島被爆第一報と考えられる。
8月6日午後7時、RT東亜放送広島空襲ニュース、ポートル

ンド傍受

8月6日午後9時、大阪中央放送局空襲ニュース、グアム傍受

8月9日正午、同盟北米向け英語送信、モトロフ声明、ハワイカウアイ傍受

8月9日午後1時1分、RT北米向け英語放送
8月9日午後3時、同盟東亜向けローマ字送信

「日本の降伏への動き」米太平洋戦略諜報局作成
8月10日、RT欧州向け英語放送「原爆目撃」談、サンフランシスコ傍受

連合国回答到着と同盟送信

8月14日午後4時4分、RT北米向け英語放送

8月14日、「ピース・トーク」カード#68、同盟欧州向け英語放送「宣言受諾の詔書まもなく発布」
8月14日、「ピース・トーク」カード#70、同盟米向け英語送信、「ポツダム宣言受諾」通報と発表

8月15日正午、東京国内放送、冒頭と終戦詔書、硫黄島傍受
8月15日、「終戦詔書英語文」
米海軍諜報局による英訳終戦詔書
8月15日午後、RT欧州向けイタリ語放送「詔書原稿」
8月15日午後1時1分、RT東亜放送「大屋編成部長大演説」全文。ポートルランド傍受
8月15日、ソ連の放送、ポートルランド傍受

9月3日、連合国最高司令官総司令部指令第二号
9月14日、GHQ海外放送再開拒否回答書米陸軍原案

北山節郎編・解説

太平洋戦争 メディア資料

全 2 卷

Ⅰ開戦—真珠湾攻撃と対外報道

Ⅱ終戦と対外報道

開戦・終戦時の日米情報戦の基本資料

刊行概要——※平成17年10月刊（二刷）

- ◆収録資料 Ⅰ 68件 Ⅱ 241件 総990頁
- ◆体裁 B5判・上製クロス装・ケース入り
- ◆揃定価 [本体 68,000円＋税] (分売はいたしません)
- ◆ISBN4-89774-233-1

すいせん——

有山輝雄 (成城大学教授)

竹山昭子 (昭和女子大学教授)

向後英紀 (NHK文化放送研究所)

田村紀雄 (東京経済大学教授)

緑蔭書房

〒173-0004 東京都板橋区板橋 1-13-1 ☎03(3579)5444

特約書店